

奥園遺跡4次調査の概要

1. 調査の環境

調査区は太宰府市宰府2丁目3307番地1にあり太宰府天満宮の南西約500m、標高40mの沖積地に位置します。5次調査区は南側に接して同時に調査をおこないました。

2. 遺跡の構成・層位など

遺構の検出面は表土下の江戸時代および鎌倉時代に続く1面、その下の平安時代後期を主体とする2面、さらにその下の奈良、縄文時代の遺物を包含する3面で構成されています。



大宰府産の土器



中国製白磁



中国製青磁他



江戸時代の井戸→

↑平安時代の道

建物跡

←鎌倉時代の井戸

南側の調査区



基石



水晶原石



国産の硯

3. 時代別の調査の概要

江戸時代には不定形小穴が、耕作の痕跡と思われる連続した窪みと石で組んだ井戸跡が見つかっており、耕作地とそれに関係した井戸を中心とする小規模な施設があった可能性があります。

鎌倉時代には調査区の北側に東西方向と南北に幅が3mを超える深さ2mほどの空濠状の遺構があり、その南側には深さ4m以上の井戸が掘られています。砂の地盤に掘られたもので両者とも深く掘られており、同時期の条坊地区での遺構に比べて規模が大きいといえます。濠は隣地に屋敷などがありそれに伴うものか、天満宮の開発に関わるものか、周辺の遺跡の分析を進めた上で位置付けが必要なものです。

平安時代後期は調査域全体が積極的に土地利用されていた時代で、4,5次調査区を南北に貫く側溝を伴う道路を中心として、その西側に炉跡や滓を捨てた土坑、溝跡などがあり、最末期には小規模な掘立柱建物が南北方向に建てられていました。土坑や溝には短時間に多量に土器が集中して捨てられた箇所があり、饗宴で使用された食器などが一括して廃棄されたものと考えられます。部分的に小規模な整地が繰り返され、この時代の中で遺構の新旧の時期差があります。

さらに平安時代の基盤となってい層には奈良時代と縄文時代の遺物を含む包含層が部分的に見られ、遺物も相応の量のものが出土しておりそれぞれの時代の生活空間があったと考えられます。

奈良時代は8世紀中ごろから後半にかけての遺物があり、縄文時代は晩期末の突帯文を含まない晩期の土器相が見られます。縄文のたまり状遺構には一部に直線的な立ち上がりを持つことから住居跡の可能性も考えられます。遺構はこれ以外に5次調査で埋め遺構に類するPitが見られる他は低調で、本格的な常時人が住んでいた集落、と言うほど発達していないようです。しかし、調査区全域で石器（剥片）が満遍なく確認されており、道具のメンテナンスをするような作業はおこなわれていたものと考えられます。北西に近接する新町遺跡3次調査でも最下層から同時期の遺構が発見されており、一時期のキャンプ地以上の機能があったのかもしれない。



土器の多量廃棄



縄文時代の石器



鎌倉時代の濠

平安時代の溝

平安時代の土坑(ごみ穴)

北側の調査区

4. まとめ

これらの状況からこの遺跡は今回の発掘調査によって、縄文時代晩期はキャンプサイトとして、奈良時代は生活域の縁辺部、平安時代後期は街路を伴う都市的空間、鎌倉時代は居館ないし天満宮の関連施設、それ以降は耕作地としての経過が想定されるようになりました。